栗東市不登校対策の方向性について

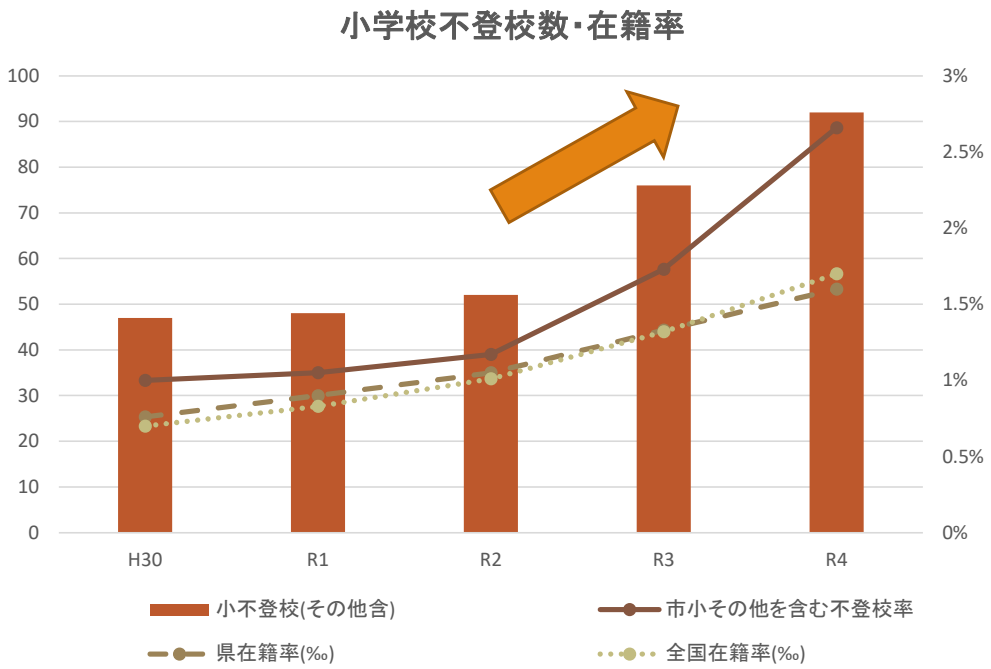
１１月６日総合教育会議

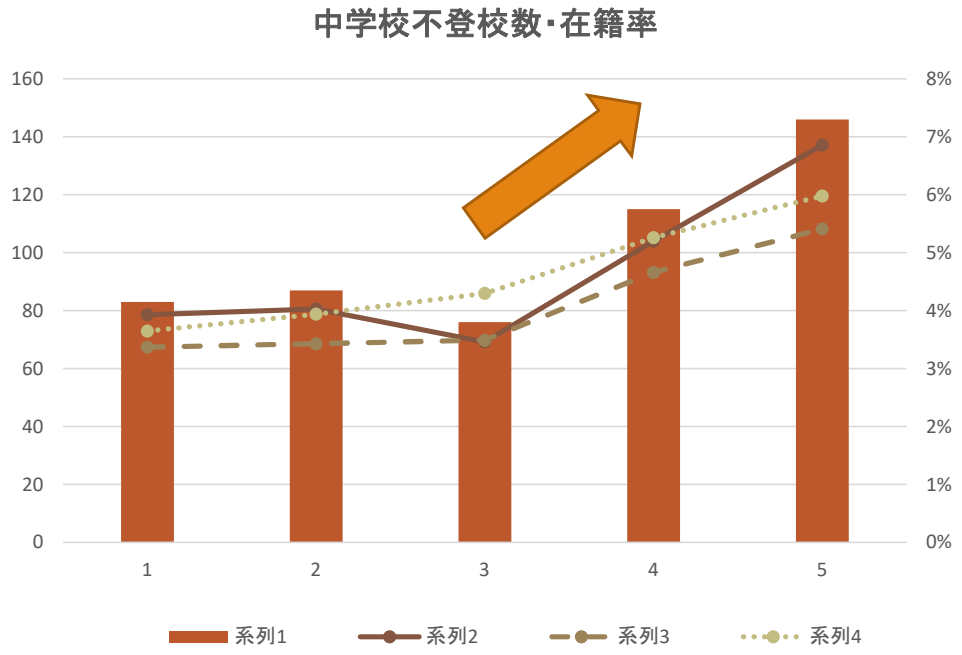
栗東市の現状

・不登校児童・生徒数と不登校出現率は増加し続けている。

・令和4年度の本市の不登校児童・生徒数(その他含む)は小学校92人、中学校146 人、合計238人で全体の小学校は2.66%、中学校は6.86%となった。

不登校の推移(平成30年～令和4年)



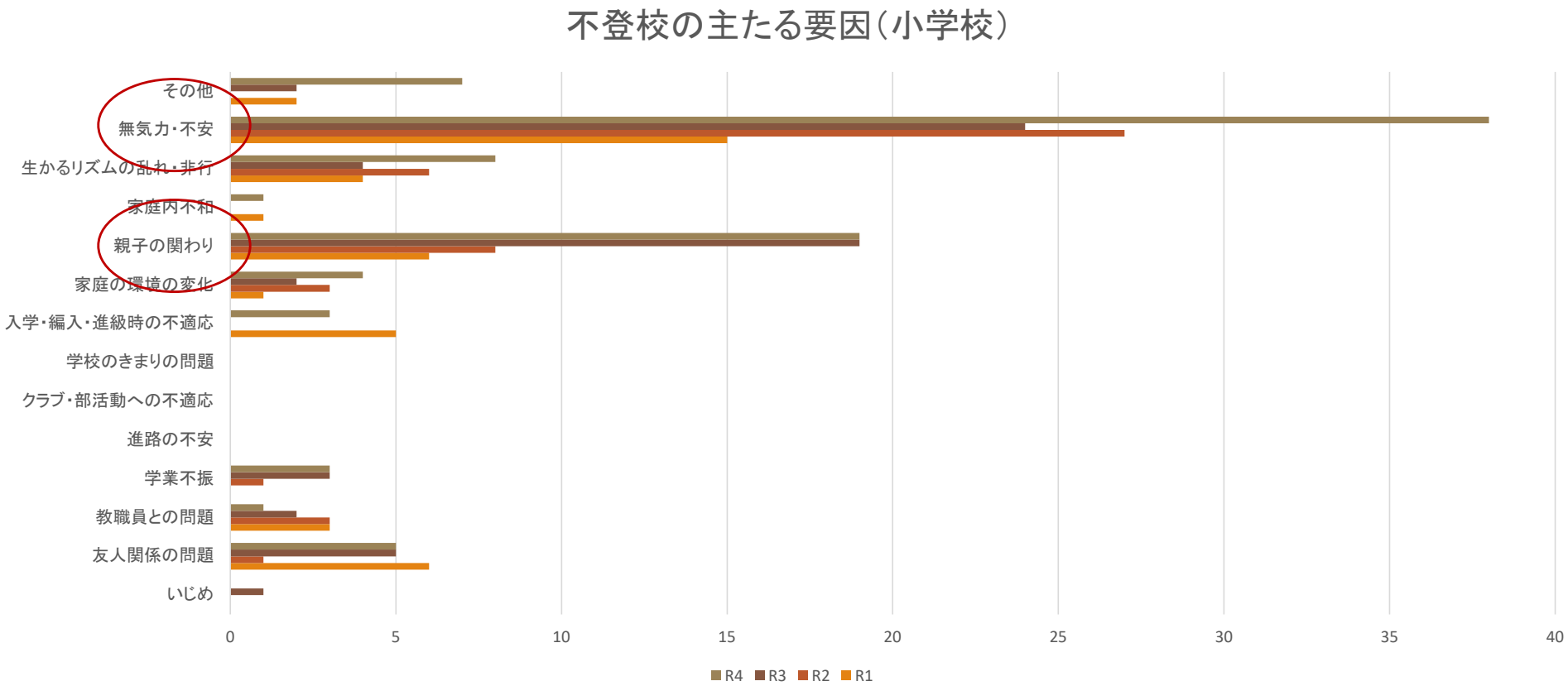


今年度の状況

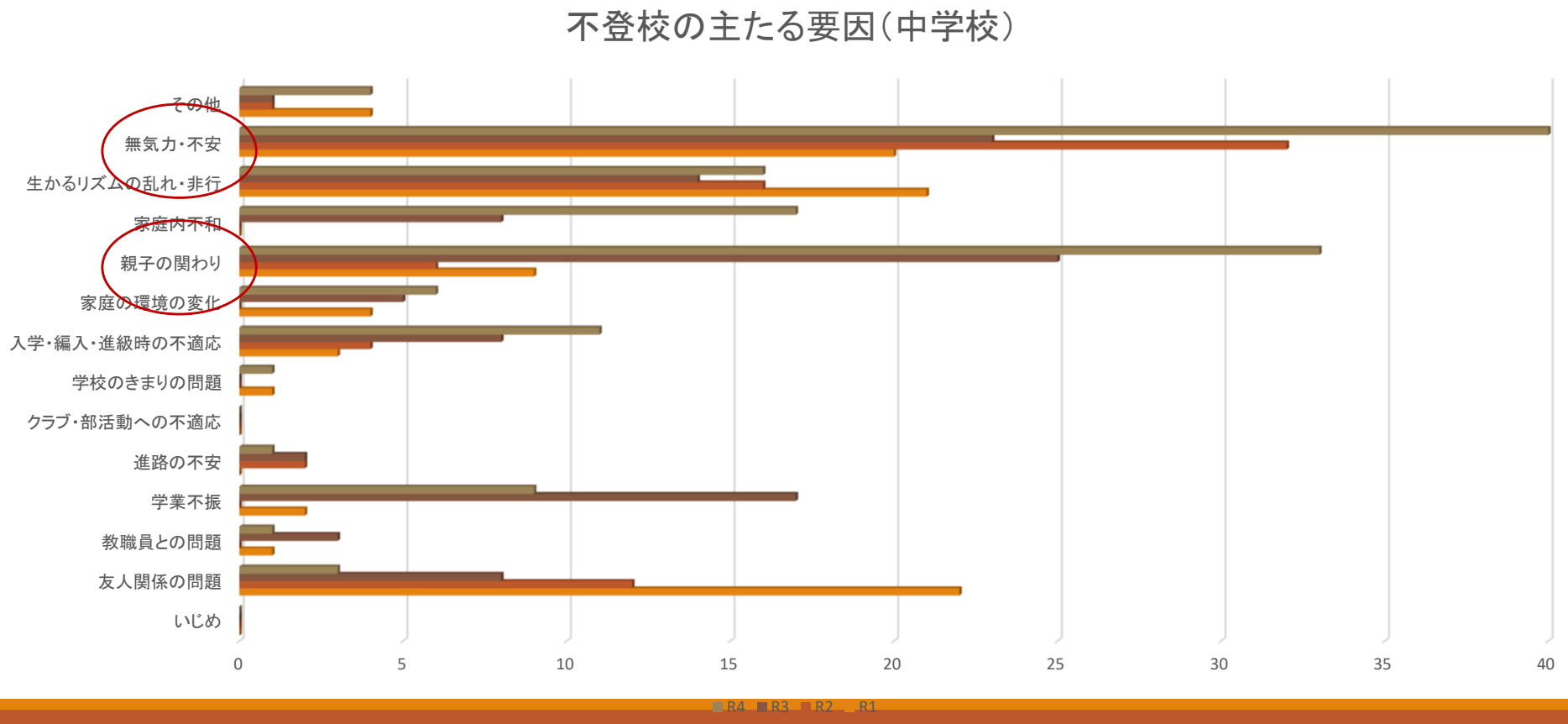
４月～９月の比較	令和4年度	令和5年度
小学校	４５人	３４人
中学校	５３人	９０人

令和5年度４月から９月末までの不登校数は小学校は減少。
中学校は大幅に増加している。

不登校の要因(R4諸課題調査から)



不登校の要因(R4諸課題調査から)



市としての不登校の考え方

「不登校はなくせなくても、
不登校問題はなくせる」

・不登校出現率を減少させるより不登校支援率を100％にする

・不登校問題についての施策が必要である

不登校問題とは

●子どもが学校に行かないことで親が悩む。

➡学校へ要望が多くなる。

●担任や学校が悩む。

➡場所、人員が不足しているため負担が大きくなる。

●出席が少ない、成績がつかない。

➡進路保障に支障がでることがある。

栗東市の不登校施策

〇子どもの「居場所づくり」が必要

学びの多様化学校(特例校)の設置

or

校内教育支援センターの充実化

学びの多様化学校と校内教育支援センターのメリットとデメリットを比較

	メリット	デメリット
学びの多様化学校	○学校に登校できない児童生徒が通う居場所ができる。 ○独自の教育課程が取り組めるためニーズに合わせた学習や進路保障ができる。	●統廃合の学校が本市にはなく、1つの学校を作ることになるため膨大な予算になる。 ●地元の学校に通えないため、疎外感がでる。
校内教育支援センター	○通いやすく、教師、学級の友人、保護者と連携がとりやすい。 ○自分が学校へ通えているという自己肯定感があがる。 ○他の児童生徒と同じような進路保障ができる。	●経営するための人員が足りない。 ●特別な時間割で学習を教えることや保護者との連絡が密になることで教員の負担が増える。

現在の本市の取組

〇学びの多様化学校の設置の可否に向けて

・岐阜市立草潤中学校へ視察

①市の教育支援センターを本校にし、校内教育支援センターを分教室にする方法

②市内の小学校を二分化し、本校を設置

➡ ①、②とも文部科学省に確認するもゼロ回答

現在の本市の取組

〇校内教育支援センターの充実化にむけて

・今年度より市内すべての小中学校に設置

・市の会計年度任用職員(週４日、４時間勤務)を配置
校内の支援主任がコーディネーターとなり、運営する

➡ 子どものニーズに合わすことで人員不足に陥り、運営が困難な状況

どちらになっても残る課題

〇学びの多様化学校や校内教育支援センターにも行けない家から出られない子どもはどうするのか？

↓

対策として・・・アウトリーチできる人材が必要

大切にしたいこと

〇栗東が好きだ。

〇自分の母校に誇りがもてる。

〇栗東のはたちのつどいに出たい。

そのためには

・地域に愛着がもてる。

・自己存在感が栗東にある。